星に送るメール

追手門学院大学国際教養学部教授
東京大学名誉教授　木村　英樹

島津さん、

久しぶりにメールを送ります。一昨年のクリスマス前後に、「よいお年を」と、年の瀬の挨拶を交わして以来ですから、ほぼ一年ぶりのメールになります。こんなにご無沙汰が続くのははじめてのことですね。

論文、「V・le・X・Y の意味機能」、読みました。楊先生の還暦記念論集、『中日言語研究論叢』に島津さんが寄せられた論文です。『論叢』の奥付には「2017 年 7 月 6 日初版発行」とありますから、島津さん自身がこの『論叢』を手に取ることは叶わなかったのですね。目次のなかの島津さんの名前を囲む黒い縁取りが、見るたびに胸に痛く突き刺さります。なので、実は、『論叢』を手元に受け取った日から昨日まで論文は読まずにいました。読めなかったのです。昨年末に長谷川君から追悼文集への寄稿を促されたのを機に、昨夜ようやく読みました。

かつて大河内康憲先生が「可視的な様態の即物的表出」を意味する述語形式と称された “V・le・X・Y”。その「可視的な様態」の内実を、より一般性の高い「動態」対「静態」というアスペクチュアルな対立の枠で捉え直す。それが今回の島津論文の狙いですね。

“ 走了进来 ” や “ 蹲了下去 ” のように、動詞のあとに “ 了 ” がくっつき、さらにそのあとに 2 音節の方向動詞がくっつくかたちの “V・le・X・Y” は、小説の地の文にしばしば登場しますが、その意味機能を明らかにすることは、文法研究の分野では難題とされ、今日まで持ち越されてきました。大河内先生の 1970 年の論文（「“ 走了进来 ” について」）以降、取り上げるべき研究がほとんどなかったこの難題に、島津さんはおよそ半世紀ぶ

りに挑まれたわけですね。

島津さんは覚えておられるでしょうか？　もう十数年も前の話になりますが、当時私はお茶の水女子大学に週に一度出講し、中国語構造論の講義を担当していました。受講生は20名足らずだったと思いますが、二十代前半の院生や学部生に混じって、ひとり社会人と思しき院生が、毎回、ひときわ熱の籠った眼差しで私の講義に耳を傾けていました。ある日、たまたま帰り道が一緒になった折に、彼女は、一見例外に見えたり、特異に見えたりする文法現象が、よくよく突き詰めてみると、その言語の文法体系のなかにあってはやはりそうあるべくしてあるのだということを、私の講義のなかで毎回気づかされるのが本当に楽しくて、わくわくする、というような意味のことを、とても控えめに、訥々と言葉を選びながら、けれども、たいへん熱く語ってくれました。私は、文法現象に対して一般化志向の強い自分と同類の仲間に出会った気がして、心密かにほくそ笑んだものです。茗荷谷駅の改札口で分かれ際に、お名前はと尋ねると、「『しまづ・さちこ』といいます」と応えられました。島津さんを「認識」したのはあの時が最初でした。

その後研究者の道に進まれた島津さんは、学会へのデビュー作となった2002年の「時間を表すフレーズを構成する前置詞“等”と“当”について」を皮切りに、「イメージスキーマからとらえた“等”の文法化」と「“一A就B”形式と“刚A就B”形式」の2編を立て続けに発表し、続いて博士論文の『現代中国語における事態間の継起関係と同時関係に関する構文的研究』、そして「“在A时候”における“在”――グラウンディング機能を担う一形式――」と、着実に成果を積み重ねていきましたが、どの論文にも、個別言語としての中国語の文法を記述するだけでは飽き足らず、つねに言語一般の普遍性を視野に収め、より一般性の高い記述を目指す姿勢が貫かれていました。

そして、今回の論文でも島津さんの一般化志向は健在です。件の「可

視的な様態」とは静態的な様態ではなく、動態的な様態すなわち〈動態的な移動の過程〉であり、その動態的な過程を表すことこそが“V・le・X・Y”の意味機能にほかならない。島津さんの結論をひとことで要約すれば、そういうことになるでしょうか。

構成要素の配置が“V・le・X・Y”とは異なる“V・X・Y（・le）”――例えば“走进来（了）”――を一方に対置し、いつに変わらず小説のなかから丹念に拾い集めた多くの実例に即して周到に考察を展開し、“V・X・Y（・le）”の静態性と“V・le・X・Y”の動態性を対照的に炙り出すといったあたりは、実に手堅く、いかにも島津さんらしい論法ですね。決して理論一辺倒に傾かず、テキストを丹念に読み込むことをつねに心掛け、言語事実に忠実な観察と実証的な分析を怠らないというのも、島津さんの研究姿勢を語る上では欠くことのできない特長ですからね。

確かに、中国語には、同じ構成要素が配列を異にすることで、一方は動態的な局面に焦点を当て、一方は静態的な局面に焦点を当てるという、そういうアスペクチュアルな対立をなす述語形式のペアが存在しますよね。例えば“在床上躺（着）”と“躺在床上”。前者は動態的な活動として「ベッドの上で寝転がっている」という局面を捉え、後者は静態的な存在として「ベッドの上に横たわった状態でいる／ある」という局面を捉えています。張国憲・盧建2010に詳しい議論がありましたね。それから、“搬出椅子来”と“搬出来（一把）椅子”。どちらの構造も、島津論文で扱われている“V・X・Y（・le）”に目的語が加わるかたちで構成されていますが、目的語がXとYのあいだに置かれる“搬出椅子来”の方は「椅子を運び出して来る」という動態的な過程の局面に焦点を当て、目的語がYの後ろに置かれる“搬出来（一把）椅子”の方は「椅子が運び出されて来て（すでに外に）ある」という静態的な局面に焦点を当てています。Kimura 1984に機能論的な観点からの議論がありましたね。

島津さんは、おそらく、このような動態と静態の対立をなす述語形式

のパラダイムのなかに“V・le・X・Y”を位置づけることで、大河内論文が提起した“V・le・X・Y”の「動詞述語形式全体のなかでの位置取り」という難題に一つの解答を提示された。と、私は理解しました。「いえ。そういうつもりでは・・・」と、島津さんは遠慮がちに首を傾げるかも知れませんが。

ともあれ、“V・le・X・Y”は、“le（了）”があるから〈完了〉の表現かと思いきや、そうではなくて、実は〈未完了〉の表現、すなわち〈過程〉を捉える表現だったのですね。そして、方向動詞を補語とする述語形式は、動態と静態の二面性を孕んでいたのですね。島津さんの論文からこの二点を知り得たことは私にとっては貴重な収穫でした。ほかにもあれこれ教わることの多い論文でした。

同時に、いくつかの宿題を与えてくれた論文でもありますよね。島津さんの指摘の通り“V・le・X・Y”の“搬了出来”が動態の表現だとして、それが表す動態と、目的語を伴う“搬出椅子来”が表す動態とは果たして同じ性格のものなのでしょうか。それとも異なるのでしょうか。異なるとすれば、どのように異なるのでしょうか。大河内先生の指摘にもある通り、“搬了出来”のかたちには否定文や疑問文に用いられないという構文上の制約がありますが、“搬出椅子来”には別段そのような制約はありません。この差はいったいどこから来るのでしょう。そもそも“搬了出来”はどうして目的語を伴うことができないのでしょう。大河内先生の仰る「即物的表出」にとって、目的語の存在は邪魔だということなのでしょうか。「可視的様態」と言えば、“啰里啰唆”（くどくどだらだら）や“说说笑笑”（わいわいがやがや）のような4音節の様態表現が想起されますが、“V・le・X・Y”が4音節であるのもそのことと関わっているのでしょうか。完了表現でもないのに“了”が用いられているのは、ひょっとして4音節を構成するため？　島津さん、どう思います？……と、そんなこんなを、ああでもない、こうでもないと、もっともっと話したかったですね。

あれは去年の新盆の頃だったと思いますが、夫君の浩俊さんが電話の向こうで「幸子が無念だったとは私は思っていないのです」と静かな声で仰いました。奇しくも、作家の朝井まかてが、昨年末に66歳でこの世を去った葉室麟を偲んでこんなことを書いています。「けれど私は『志半ばで逝かれた』と言いたくないし、ご無念であったろうとも想像しない。葉室さんは生き急いだわけでも、書き急いだわけでもない。書くべき時に、書くべきことを書く」人であった、と。島津さんに対する私の思いも同じです。島津さんは中国語学者としては晩学の人であり、論文の数こそ同年代の研究者に比べて少なくはあったけれど、だけど、考えるべき時に、考えるべきことを懸命に考え抜き、精一杯知力を傾け、どこまでも誠実に論文を書き綴って来られました。その島津さんに研究者としての無念さはなかったと私は信じています。

島津さん、私の「研究者としての寿命」ももうそう長くはありませんが、あともう少しだけ仕事をして行きたいと思っています。あのときのように島津さんをわくわくさせるような話題をすこしでも多くそちらに持って行けるように。

ずいぶん長いメールになってしまいました。さて、このメール、どこに送ってよいものやら、アドレスが分かりません。幸い、今夜は澄み渡った夜空に星がいっぱい出ています。数多の星のなかの島津さんが住むどこかの星にこのメールが届くことを願って送信します。s-shima＠huyu-no-hosizora……、Click ！

2018年1月12日　木村英樹